

Q：「話す力」を身に付けさせたいのですが，上手に話すための指導法を具体的に教えてください。

A：授業だけでなく，日常生活の中でも，子どもたちに「必要なことを的確に話させたいな」と思うことはよくあります。人前で上手に話すためには，場数を踏み，場馴れすることが大切です。学習の場面で，できるだけ多く話す機会や場を与え，「話す力」を伸ばすことにつなげていきましょう。

## アドバイス：

### ①全員が声を出す機会を設けましょう

ともすると1時間の間に一度も声を出さずに国語の授業が終わってしまう子が出ることはありませんか。国語の授業では特に，全員が必ず声を出す機会を意図的に設定していきましょう。体育の授業を準備体操から始めるのと同様に，声（のどの筋肉）も準備体操をしてから授業に臨むと声の出がよくなり，発表や発言に弾みがつきます。詩の音読や群読から授業を始める，（開始の）チャイムが鳴るまで教科書の音読をするなど，声を出すところから授業を始めてみましょう。

### ②「相手に届く声」を意識させましょう

姿勢や口形，言葉遣い，発音，間の取り方など，上手に話すための技能は様々ありますが，最も基本となるのは，適切な声の大きさで話すことです。「相手に届く声」で話すことが聞き手への礼儀であることを伝え，適切な大きさの声を出そうとする意識を持たせていきます。「もっと大きい声で話さないか」では，話すだけで精一杯の子は苦痛に感じるでしょう。また，全体の場で「聞こえませーん」という優しさに欠ける言葉は言わせないよう指導しましょう。声が小さく，話すことが不安な子ほど，他の子どもたちに声を届けるという意識が薄れ，教師だけに向かって話そうとします。そこで，その子から一番遠い所に立って話を聞きます。「よく聞いているよ」というメッセージを送り，安心感を与えてあげましょう。

### ③良い見本を見せ，まねさせましょう

こんな話し方で発表させたい，スピーチさせたいという具体的な規準をモデルとして教師が実演し，それをまねさせてみましょう。上手な子どもを見本にすることもできますが，教師が自ら示す見本は，子どもたちの目指す明確なゴールとなります。また，教師側としても，自分が同じことを実際にやってみることで，子どもたちがどこでつまづくかを予測することができ，事前に手立てをうつことで効果的な指導につながります。

### ④準備・練習の時間をしっかりと確保しましょう

スピーチやプレゼンテーションなど，多くの人前で話す活動をする際には，発表原稿を書いたり，練習をしたりする時間を確実に確保しましょう。初めは詳細な「読み原稿」で，「ここで間を取る，目線を上げる，資料を提示する」など話す時の動作まで書き込めるものにします。慣れてきたら「メモ」レベルのもので発表できるようにしていきます。「うまく話せた」という成功体験が「話す力」を伸ばすことにつながるはずです。

**Q：音読の教材や指導内容について、効果的な手立てを教えてください。**

**A：音読は学習指導要領「C 読むこと」領域の指導事項で、次のように示されています。**

第1学年及び第2学年…語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読すること。

第3学年及び第4学年…内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。

第5学年及び第6学年…自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。

従って、音読は「A 話すこと・聞くこと」領域と関連付けながらも、「C 読むこと」領域の能力を育てるための指導であることを前提にして進めていきましょう。

## **アドバイス：**

### **①よい音読をするための観点（技能）を理解させましょう**

単にすらすら読むことだけでなく、よい音読をするための観点（技能）を子どもたちに分かる言葉や実演などで理解させていきましょう。

- 観点の例としては
- ・正しく読むこと
  - ・声の大きさ，速さ（緩急），強弱，抑揚，声質
  - ・間の取り方，目線，表情

### **②読ませ方を工夫しましょう**

音読は日常的に行われる活動であり、ともするとマンネリ化することが考えられます。例えば「～回読みなさい」だけでは興味をもって音読を続けさせることは難しく、また「人物の気持ちを考えながら読みましょう」では曖昧すぎて、どう音読につなげていくのかが分かりにくいでしょう。以下の例を参考に、マンネリ化からの脱却を図り、継続して取り組めるようにしていきましょう。

- ・人数に変化をつける…いつも一人で読むのではなく、一行ごとに人を増やして読む，二人組で交代で読む，列で読む，学級全体を二つに分けて読む，子どもたちが自分の読みたい箇所を選び，そこになったら立ち上がって読むなど，様々なバリエーションを考える。
- ・速さに変化をつける…「速読」やどこまで速く読めるかを競う。
- ・読む量に変化をつける…「。」読み，一文読み，段落読み，など。

多くの子どもに読ませたい場合，文章のまとまりを考えさせたい場合など，ねらいや目的に応じて変えていく。登場人物の台詞と地の文で役割読みをさせることもできる。

### **③音読を発展させましょう**

特に高学年では，朗読や朗読劇，群読といった活動も学習指導要領に取り上げられています。他にも，暗唱や語りは音読を発展させた活動であると言えるでしょう。聞き手意識をより強く持たせ，自分なりに理解したり解釈したりしたこと，感動などを他者に届ける力を培うことがねらいになります。

※ 音読は子どもたちが意欲的に取り組むことのできる学習活動です。様々なやり方を工夫し，読み取ったことを言葉にのせて交流する，楽しい雰囲気での授業を目指しましょう。子どもたちが楽しみながら音読をすれば，「読むこと」の能力も確実に伸ばしていくはずですよ。

**Q：作文指導について、内容や構成を高める指導法と個別指導の効果的な手立てを教えてください。**

**A：作文といっても・報告文・観察文・記録文・説明文・紹介文・宣伝文・推薦文・感想文・随筆・創作文など、その文種によって身に付く能力が異なり、指導方法も異なります。小学校の段階では作文の種類に応じて得手不得手があるわけではなく、「書くこと」が苦手な子はどの作文も苦手を感じる傾向があります。書く力は一朝一夕に身に付くものではなく、粘り強い積み重ねが大切です。**

## **アドバイス：**

### **①よい文章をまねさせましょう→「読むこと」と関連づけた指導を**

子どもたちが作文を「書けない」原因の多くは、「何を書いていいかわからない」「どう書けばいいのか分からない」というようなことだと考えられます。これを打破するために、まずは良いモデルをまねることから始めてみましょう。手本となる学習材や教師自作の見本をもとに、もとの文章に則って書き換えさせていきます。学習指導要領に示された学年の段階に応じて、学習材の構成や表現の工夫などを分析させながら読ませ、どう書かれているかを学ばせていきましょう。

また、子どもの書いた文章の中からよく書けているものを取り上げ、友だちの良さを見つけて真似て書くということを積極的に奨励します。「こういうことを書くのだ」「こういう風に書くのだ」と考えることができる上に、互いに読み合う活動を通してコミュニケーションを図ることもねらえます。

### **②題材や書く事柄、内容をしっかりと考えさせましょう**

「書けない」原因のもう一つは、「書くことが思い浮かばない」ということでしょう。これは、作文の内容面にかかわってきます。そこで「しっかり考える場」を与えていきましょう。方法としては、まず題材や書く事柄、内容をいくつか提示し、その中から選択させるという方法があります。ウェビングマップを使って、自分の考えを耕したり広げたりすること、友だち同士で練り合う場を持つことも有効な手立てです。「しっかり考える場のある授業」をつくっていきましょう。

### **③質より量を実践しましょう**

文章を書き慣れていない子どもたちに、「構成の整った文章を」「内容の充実した作文を」と要求したところで、よい作品を書くことは非常に難しいでしょう。スポーツに体力が必要なように、「書く」ためには「書くための体力」が必要なのです。そこで、「毎日書き、書き慣れる」ことを目指しましょう。授業の中に、書く時間を必ず確保したり、年間を通して計画的かつ継続的に書く活動を取り入れたりして「書くことの体力」向上を図ります。ただし、スポーツのトレーニングも同じことの繰り返しではマンネリ化すると同様、楽しくない、興味のない、感動のないことばかりを書かせていくのは、国語教育としてふさわしくありません。文種を選んで書かせたり、ゲーム的な要素を取り入れたものを書かせたり、テーマを絞って書かせたりするなどの演出も必要です。

「質」のよい文章は「量」の上に成り立つものです。

Q：説明文の指導項目と指導の流れについて、どのように考えたらよいでしょうか。楽しくわかりやすく授業を進める方法を知りたいです。

A：子どもたちが自ら説明的文章を読むのは、何か知りたい情報があったり、書かれている内容に興味を持ったりした時です。内容に対する知的好奇心や興味関心が喚起されると、それはとても主体的な読みとなり、子ども達を読む目的が達成されていくこととなります。しかし、書かれている内容を読み取ることだけに止めてしまうと、説明的文章を読む力の育成が十分に図られているとは言えません。学習指導要領で示された指導事項を確実に指導できる単元作りを通して指導にあたります。

## アドバイス：

### ①説明的文章で身に付けたい力を明確にしましょう

学習指導要領「C 読むこと」領域、「説明的な文章の解釈」の指導事項をまとめて考えると、説明的文章で身に付けたい力は「文章や資料から情報を探す力」「書かれている内容を正しく読み取る力」そして「論の展開方法をとらえ自分なりの考えを表現する力」であると言えるでしょう。

### ②発達段階に応じたねらいを設定しましょう

上記の身に付けたい力もふまえると、説明的文章の読みは、大きく次の三つの段階でとらえることができます。

- |  |
|--|
| I…書かれている事柄や構成を正しく読み取ること。<br>II…筆者の述べ方もふまえ、筆者の考えを読むこと。<br>III…筆者の主張や述べ方などに対して、自分なりの考えをもち表現すること。 |
|--|

低学年ではIを中心にねらいを設定した読みが展開され、中学年、高学年と学年が上がるに従って、II・IIIを重点としたねらいを設定することが望ましいでしょう。教科書に掲載されている説明的文章であれば、内容や構成、筆者の述べ方など、それぞれの発達段階が考慮されています。それぞれの学習材の特徴を見極め、初めは書かれている「内容」に対する興味が、読み進める中で筆者の述べ方や考えに興味に向くような単元構想をしていくことが大切です。

### ③発達段階に応じた説明的文章の具体的な読みの方法をふまえましょう

- |            |   |
|------------|---|
| <b>低学年</b> | ・「問い（問いの文）」に対する「答え」を見付ける。<br>・順序を表す言葉、数を表す言葉に着目して読む。<br>・形式段落を理解する。   |
| <b>中学年</b> | ・要点をまとめたり、意味段落に分けて小見出しをつけたりする。<br>・段落相互の関係を文章構成図に表す。<br>・事実と意見を読み分ける。 |
| <b>高学年</b> | ・要旨をまとめたり、要約したりする。<br>・筆者の主張を読み取る。<br>・筆者の主張に対する自分の意見を表現する。           |

Q：物語文の指導の際に、子どもたちが物語の中に入り込めるような授業をしたいのですが、「気持ちを考える」だけで終わらないような授業の展開について教えてください。

A：国語科の学習では、学習指導要領の指導事項を、言語活動を通して指導することとされています。指導事項は、「子どもたちに身に付けさせたい能力」と置き換えることができるでしょう。「子どもたちが物語の中に入り込む」ために、どの能力を身に付けさせ、そのためにどんな言語活動を位置付けるかを考えて授業を組み立てていきましょう。

## アドバイス：

### ①「単元を貫く言語活動」を位置付けましょう

「単元を貫く言語活動」とは、指導過程の各段階で「ここで話し合う」「ここで書く」「ここで音読する」といったバラバラの活動ではなく、単元の始めから終わりまで一貫する、中心となる言語活動のことです。例えば低学年で「読書交流会で好きなところを紹介する」という学習を、単元を貫く言語活動として位置付けたとします。すると、好きなところを見付けるために、「登場人物の行動や会話・心情の変化に注目して読む」「場面や事件の時間的な順序・事柄の順序をとらえて読む」「好きなところを紹介する上で大事な言葉や文を書き抜く」などの学習活動が見えてきます。これらを踏まえ、単元構成（指導過程）や授業展開を考えていきます。

### ②主体的に読む過程を重視して指導しましょう

質問にある通り「登場人物の気持ちを考える」という読みだけでは、様々な言語活動を実際に展開していくことは難しいでしょう。そこに文学的な文章を扱う際の物足りなさを実感するのだと思います。「子どもたちが物語の中に入り込む」ためには、より主体的に作品とかかわり、思考や判断を求めるような読み方をさせていくのが効果的です。例えば、低学年では「物語のお気に入りの場面を意識して読む」、高学年では「自分の心に強く響いてきた作品のメッセージは何か、自分は作品のどこに関心をもったのかを意識して読む」など、主体的に読む過程を重視していきましょう。

### ③読書活動を重視しましょう

国語の教科書を見ると、単元の終わりや巻末にその単元に関連した図書紹介が非常に充実していることが分かります。国語の学習においては一つの教材だけを詳しく読みながら学習を進めるのではなく、複数の本や文章を様々な方法で関連づけて取り上げ、多読につなげることが求められています。文学的な文章であれば、例えばシリーズ作品や同一作家の作品、同じテーマ、ジャンルの作品などと関連を図ることができます。他作品と比べて読んだり、重ねて読んだりすることで、その作品への理解をより深めることにもつながります。

※ 言語活動は、身に付けさせたい能力の育成を十分に実現するためのものですから、最適な言語活動を選ぶ必要があります。例えば「場面の様子について想像を広げて読む」能力の育成を目指す場合には「紙芝居と音読」という言語活動が、「登場人物の行動を中心に想像を広げて読む」能力育成には「物語を演じる」や「人形劇」などの言語活動が適しています。

Q：読書指導について、子どもの学年に応じて読書レベルを上げていきたいのですが、高学年でも中学年以下のレベルの本を選んでくる子にどのような指導をしていいか悩んでいます。

A：千葉県では「読書県『ちば』の推進」が掲げられ、学習指導要領では読書活動の充実が示されるなど、子どもたちの読書生活の充実が、大きく注目されています。読書指導のポイントとしては、学校図書館の活用を中心とした学校全体の取り組みと、国語の授業を中心とした教科の学習場面での取り組みがあります。

## <学校全体の取り組みとして>

### ①日常生活の場面での読書生活の基礎作りを心がけましょう

子どもたちがいつでも本に触れ合えるよう、教室の中に様々な本を置いておきます。この時には、学習に関連した本、新刊の本、担任が読ませたい本など幅広く、そして学級の数に対して十分な冊数を用意したいものです。また、担任が朝読書や朝の会などの時間を利用して、読み聞かせを日常的に行っていくことも効果的です。

### ②学校図書館・図書委員会活動の充実をはかりましょう

蔵書の充実や本の配置は非常に大切です。それ以外に、学校図書館や図書委員会を中心とした読書の推奨活動を充実させていくことが効果的です。図書委員会の児童による「読み聞かせ」や「ブックトーク」、「読書郵便」や「本の紹介コーナー」の設置、他にも本の貸し出しや学校図書館の利用を促す活動など、学校全体に読書に取り組もうとする雰囲気醸成していくことがとても有効です。

## <国語科の授業を中心とした取り組みとして>

国語の教科書を見ると、単元の終わりや巻末にその単元に関連した図書の紹介が非常に充実していることが分かります。国語の学習においては一つの教材だけを詳しく読みながら学習を進めるのではなく、複数の本や文章を様々な方法で関連づけて取り上げ、比べて読んだり重ねて読んだりする多読につなげることが求められています。

### ①単元学習の中に読書活動を意図的に組み込みましょう

かつては、学習が終わると発展読書として読書活動を位置付けることが多くみられました。現在は、単元を貫く言語活動（その単元で中心となる言語活動）の特徴をふまえて、単元学習を進めながら関連する本を読み進める「並行読書」や、学習の前に関連図書を読み進めておく「事前読書」も推奨されています。

### ②読書そのものを促す言語活動を取り入れましょう

学習指導要領の中に示された言語活動の中には、読書そのものを促す活動があります。単元のねらいともあわせて、これらの言語活動を効果的に位置付けていきましょう。例えば、「ブックトーク」や「読書案内」「新刊紹介」などの言語活動では、友だちに本の紹介や説明をしなければなりませんから、必然的に学年相応の本を選ぶこととなります。また、読書への意欲を高めるためには、「絵本の読み聞かせ」の活動を取り入れて、自由に好きな本に触れさせることも効果的です。

**Q：漢字が覚えられない児童が多く困っています。楽しく，効果的に覚えられる方法を教えてください。**

**A：漢字は，自分が表現する時に「使えるもの」として習得されていくことが大切です。従って，漢字だけを取り出して学習していくよりは，文中で使いながら習得していくのが理想的です。「字形を整えて正しく書くこと」「正しく読むこと」「漢字の持つ意味がわかること」この三つをバランスよく指導し，語彙として文脈で使えることを目指し，楽しく効果的な指導法を工夫していきましょう。**

## **アドバイス：**

### **①練習のさせ方を工夫しましょう**

漢字の形と教科書や市販のドリル中での使われ方をひたすらノートに何回も書かせるやり方がよく行われています。これでは，漢字が違う使われ方をするととたんに書けなくなりますし，何よりも模倣に止まり思考を伴った習得にならず，応用発展できる力が育っていかないことが懸念されます。そこで効果的なのは，「文作り」です。ノート練習の中で漢字を使った文作りをさせていきましょう。漢字の使い方を変えながら，一文に，三つ以上の漢字を使って作らせていきます。慣れてきたら，一文の中で，習得する新出漢字を二回以上使って作る，などの条件を出していくこともできます。また，一つの漢字を一回の練習で終わらせるのではなく，時期をずらしながら数回繰り返すと，より確実な定着を図ることができます。

### **②集団学習を導入してみましょう**

新出漢字を教師が一斉に指導し，そこから先は宿題で練習して終わる，という個人の学習に終始することが多く見られます。漢字学習を個人→集団学習にするための一つのアイデアとして提案したいのが「漢字先生」と「自作のテスト問題作り」です。

#### **・漢字先生**

新出漢字の指導を教師の代わりに子どもたちが分担して行うやり方です。児童は，自分の分担の漢字の読み方，筆順，部首や画数，意味の他，成り立ちや熟語，例文などその漢字に関する事を調べて説明します。（学年に応じてですが，漢字辞典を使わせませす）決まった大きさの紙にまとめさせ，しばらく教室に掲示したり，書き込み式のドリルを併用し，その場で練習をさせたりすることもできます。自分が担当した漢字は思い入れを持って覚えることは勿論，他の子にも「〇〇さんが発表した漢字だ」と印象付けることができます。

#### **・自作のテスト問題作り**

子どもたちが作った文を集めてテストを作ります。その際，誰が作ったのか名前を入れてあげると，子どもたちの意欲が高まります。次は自分の問題を採用してもらおうと，練習の文作りへの意欲も喚起されたり，他者理解にもつながったりする効果があります。できるだけ日常的な出来事を表した楽しいものを取り上げることで，本当に使えるものとして習得され，漢字を積極的に使おうとする意欲にもつながります。

※ 漢字辞典の使用もうまく取り入れていくとより効果です。

Q：漢字を雑に書く子がとても多いです。漢字を正しい筆順で丁寧に書けるようにするためには、どうしたらよいですか。

A：筆順について、学習指導要領解説国語編では、第1学年及び第2学年の「書写に関する事項」の中で、次のように示されています。

「筆順」は、書き進む際の合理的な順序が習慣化したもののことである。学校教育で指導する筆順は、「上から下へ」、「左から右へ」、「横から縦へ」といった原則として一般に通用している常識的なものである。

従って、漢字の「正しい読み方」や「正しい使い方」と同じように「正しい筆順」という言い方が適するかどうかは、議論が分かれるところでしょう。しかし、教科書に取り上げられた筆順は、文字を速く、正しく、美しく書くための近道となります。積極的に身に付けさせたい能力の一つです。

## アドバイス：

### ①原則を教えましょう

学習指導要領に示されている「上から下へ」、「左から右へ」、「横から縦へ」が漢字を書く上での原則であることを理解させます。原則から外れたり、難しい筆順（「必」「飛」「母」など）については、授業の場で特別に取り上げて指導していくことが必要です。

### ②ひらがなとカタカナの筆順を確認しましょう

ひらがなとカタカナは、共に第1学年で習得すべき文字です。この時に筆順も含めた確実な習得を図ることが理想です。筆順が乱れている子の多くは、漢字ばかりでなく、ひらがなやカタカナの筆順も乱れている様子が多く見られます。画数の少ないひらがなやカタカナを見直すことで、筆順に対する意識を持たせていきましょう。

### ③新出漢字の学習場面で、筆順も確認させましょう

特に高学年では、新出漢字を全体で指導していく時間が十分にとれないこともありますが、意図的に筆順を取り上げることで、子どもたちの意識も高まります。原則と違う筆順である漢字の場合や、難しい筆順である漢字の場合は、特に丁寧に指導していきましょう。

### ④板書の筆順に気を付けましょう

子どもたちは、毎日先生が黒板に書く文字を見て学んでいきます。正しい文字を書かなければならないことは勿論、丁寧に書くことも心掛けていきましょう。そして、子どもたちに筆順を身に付けさせていくために、まずは教師自らが自分の筆順を見直し確実に習得しましょう。子どもたちは、毎日よい見本を見ることとなります。

※ 筆順を習得させたり、矯正させたりするには、子どもたちの意識をどう高めていくかが大切です。教科書の筆順に沿って書くと、正しく覚えやすい、美しい文字が書ける、速く書ける、などを実感させていくことが有効でしょう。

**Q：語彙力を増やす手立てや工夫はありますか。**

**A：語彙が豊かであると、言葉の引き出しが増え、表現の幅を広げていくことが期待できます。語彙に着目し表現を楽しむ力を育てていきたいですね。**

## **アドバイス：**

### **①様々な言葉遊びを取り入れてみましょう**

言葉遊びは簡単に楽しく取り組むことができます。言葉を「集める」「分ける」「比べる」「選ぶ」といった言語操作の中に思考操作が組み込まれます。しりとりやなぞなぞ、回文や早口言葉など、子どもたちが「言葉っておもしろい」と感じられるような学習を取り入れ、普段から言葉遊びに親しませていきましょう。

### **②慣用句やことわざを習得させましょう**

慣用句やことわざを習得すると、使える語彙や表現もぐんと増えてきます。意味とともに種類や特徴を様々な面から調べ、集めたり分類したりする学習とともに、クイズ作り、短文作り、オリジナルことわざ作りなど、楽しみながら取り組める活動も組み込んでいきましょう。

### **③漢字とともに学ぶように工夫しましょう**

せっかく習う漢字ですから、漢字だけを習得するのではなく、使われ方とともにその漢字を含む語彙も一緒に習得できるといいですね。四字熟語や故事成語などは、慣用句やことわざと同様にクイズや文作りなどの活動を考えることができます。

### **④辞書を楽しく使いましょう**

辞書を引く楽しさは、今まで知らなかった新しい言葉に出合う楽しさのほか、今まで分かっていたはずの言葉の別の意味を知る楽しさがあります。国語はもちろんのこと、他教科でも、分からない語句に出合ったら自ら辞書を手にとって調べる習慣が身に付くと語彙がぐんと広がります。

辞書を使うことに慣れる学習にもゲームが効果的です。辞書引きゲームや見出し語ゲーム、違った種類の辞書の読み比べや辞典作りなどの学習もあります。また、常に辞書を机の上に置き、引いた言葉には付箋をつけていく「辞書引き学習」もよく取り入れられています。付箋の数を友だちと競うことで意欲を高める効果もねらえるようですが、何といても常に辞書が身近にあることで、分からないことがあれば、すぐに辞書を引く習慣が徹底されることが大きな効果のようです。

### **⑤読書を好きにさせましょう**

書物は語彙の宝庫です。読書好きの子は、語彙も知識も豊富です。本の紹介や読み聞かせ、またブックトークや読書発表会などの国語の学習を意図的に展開しながら読書好きの子を育てていきましょう。

Q：「て・に・を・は」の使い方がよく分かって、しっかりと身に付く指導法があれば教えてください。

A：助詞の指導については、学習指導要領第1学年及び第2学年の「表記に関する事項」に次のように示されています。

助詞の「は」、「へ」及び「を」については、視写や聴写の指導などを繰り返し行うことによって、文の中で使えるようにすることが必要である。

助詞については、個別に文章をよく見て、単に助詞の使い方だけの問題なのか、いわゆる「文のねじれ」と言われる文全体の構成上の問題なのかを見極めながら指導してあげるのがよいでしょう。

## アドバイス：

### ①助詞の特徴に気付かせましょう

助詞「は」「を」「へ」は、名詞＋助詞で使われます。いわゆる「くっつき」の「は(wa)」「を(o)」「へ(e)」であることを理解させて、語中の「は」「を」「へ」と区別させていきましょう。そのためには、「～は～。」「～を～。」「～へ～。」の文を何度も読んだり、名詞を入れ替えたりする学習を繰り返し、物の名前や場所にくっつく「は」「を」「へ」が「wa」「o」「e」と発音することに気付かせましょう。

### ②文作りの学習を繰り返し、理解と定着を図りましょう

漢字の習得や言葉のきまり（文法）の習得など、言葉に関する学習において大切なことは、実際に使う形や場面に当てはめて効果的に学習することです。それには、文作りが適しています。「は」「を」「へ」の助詞の場合、例えば「りすはたべる」「木のみをたべる」を「りすは、木のみをたべる」のように、述語が同じ二文を一文にしたり、「わたしは、学校へ行く」を「わたしは行く」「学校へ行く」のように一文を二文にしたりする学習です。助詞の学習と同時に文の構造にも触れることができます。

### ③聴写を意図的に取り入れましょう

学習指導要領にも「視写や聴写」とありますが、視写に比べ聴写を行う機会は少ないのが実情ではないでしょうか。助詞の習得のためには、積極的に聴写を取り入れていきましょう。聴写は、自分が書き上げた文（文字）と元の文（文字）を比較することができます。漢字の有無や読点の位置の他、文字の間違いに気付く機会が多く、発音と表記の異なる「は」「を」「へ」の習得学習にも効果的です。

### ④文法の誤りを確認しましょう

小学校の段階では、低学年に限らず、高学年の子どもたちも「文のねじれ」といわれる誤りが数多くみられます。例えば「わたしは、今年一番がんばったのは運動会です」など「が」を「は」としてしまったり、「この話の中で、戦争を主人公の気持ちを考えながら読んだ」など「を」が重出してしまったりする間違いです。これらに対応するためには、文章を読み返して、推敲させる習慣をつけたり、同じ誤りを繰り返す場合には、個別に指導したりする必要があるでしょう。

Q：言語活動の充実のためには、国語の授業でどのようにすればよいですか。

A：学習指導要領では「言語活動の充実」は、各教科等において児童の思考力・判断力・表現力等を育むための手立てとして位置付けられています。国語科では「言語活動の充実」に応え、言語活動を設定した単元づくりが見直されています。ポイントは「単元を貫く言語活動」を位置付けた授業づくりを意識的に進めていくことです。

## アドバイス：

### ①「単元を貫く」ように意識しましょう

「単元を貫く言語活動」とは、指導過程の各段階で「ここで話し合う」「ここで書く」「ここで音読する」といったバラバラの活動ではなく、単元の始めから終わりまで一貫する、中心となる言語活動のことです。例えば同じ文学作品の学習材を扱うにしても、「音読発表会をしよう」という言語活動と「続き話を書こう」という言語活動では、指導事項（身に付けさせたい能力）が異なり、単元の指導過程の各段階で設定する具体的な言語活動も変わってきます。

### ②言語活動をステップで考えてみましょう

学習指導要領解説では、言語活動の取扱いとして、3領域における指導事項を例示された言語事項を通して指導するように示されています。言語活動を位置付けた授業は、次のステップで考えていきましょう。

- ① 指導事項（身に付けさせたい能力）が何かを見極める  
↓  
→学習指導要領の内容の（1）
- ② ①を身に付けるのにふさわしい言語活動を位置付ける  
↓  
→学習指導要領の内容の（2）
- ③ ①，②にふさわしい教材，学習材を選ぶ  
↓
- ④ 具体的な学習指導の展開を考える（指導過程）

学習指導要領に示された言語活動例を参考に、その種類や特徴、目標（ねらい）との関係でなぜ位置付けるのかを十分に吟味した上で、単元を貫く言語活動は何がよいかを考えていきましょう。

### ③教師が言語活動を実際に行ってみましょう

活動を上手に設定することは、授業の活性化を促し、子どもたちに学習への理解をうながし、意欲を喚起させることとなります。そこで問われるのは、言語活動自体の「質」。

それには、教師自身がその言語活動を実際に行ってポイントを確かめることが大切です。また、教師自作の作品や実演は、子どもたちに示す何よりの見本であり言語活動のモデルとなります。

※ 言語活動はあくまでも「手段・方法」です。

言語活動の充実という思いにとらわれすぎると、言語活動が目的となり活動主義に陥ってしまう危険性があります。言語活動はあくまでも「手段・方法」であり目的になってはなりません。言語活動を通して指導事項を指導する。つまり、子どもたちに確かな言葉の力を育てていくことに言語活動の眼目があるのです。

**Q：**発言する子がだんだん決まってきました。全員が参加するような授業をするには、何かよい手立てがありますか。また、一問一答の授業になりがちなので、子どもたちから出た意見や感想から学習問題を作って、最後にまとめるような授業にしたいのですが、どのように進めたらよいですか。

**A：**一部の決まった子だけが発言して進んでいく授業を避け、できるだけ多くの子が発言し、全員が参加する授業を目指したいものです。その一つの対策として、二人組による対話学習を授業の中に効果的に組み込んでいく方法があります。この学習法は国語に限らず、他教科でも取り入れることができます。

## **アドバイス：**

### **①二人組による対話学習を取り入れてみましょう**

座席の隣同士の二人による話し合いです。学級全体の前で話すことに抵抗がある子でも隣の友達であれば話す抵抗感が薄れ、且つ二人なら必ず話す必然性が生じます。二人組で話し合っている間は、全員が授業に参加していることになるのです。また、二人組では体の向きを大きく変える必要がないので、教師も全体を見回して、うまく話し合いが進んでいないペアを見付け、支援することができます。一斉で話し合いをする前に、まずは二人で話し合うことで、自信を持って発言できる子が増えてきます。

### **②効果的な学習場面で取り入れましょう**

単に答えを確認し合うという場面よりは、互いに意見を述べ合ったり、話し合いながら答えを導き出したりするなど、思考操作を伴う学習場面で効果があります。初めは簡単な課題から始め、慣れてきたら互いに質問し合う、討論し合う、二人の意見を協議し一つにまとめて合意形成を図るなど、段階を追って発展させることもできます。

### **③ルール（約束）を決めましょう**

この学習では、話し合いのやり方で事前にルールを決めておくことがコツです。以下に例を挙げますが、学級の実態や発達段階に合わせて加えていきましょう。

#### **ア 時間いっぱいまで話し合い、途中でストップしない。**

「3分間」と指示をされたら、3分間話し合いを止めずに続けることを約束します。どうしても話し合いが続かない場合は、同じ内容を何回も繰り返してよいこととします。慣れてくると、自分たちで続ける方法を工夫するようになります。

#### **イ 必ず双方とも話す。**

どちらか一方が話すだけでなく、必ず交代して両方が話すようにします。時間が短い場合には、その配分も考えていくことが必要になります。

#### **ウ 向き合って、相槌をうちながら聞く。**

体の向きを少し変えさせて、向かい合う姿勢を取らせます。ノートや資料を見せ合いながら話し合う場合には、それに応じた姿勢を取らせていきましょう。

※ 対話学習の後には、その結果を学級全体の前で発表したいという意欲が高まります。また、全体の前でうまく話せない時には、隣の子が助け船を出すことを奨励しましょう。時には、隣の子がすごく良い考えを持っていたから聞いて欲しいと本人の代わりに手を挙げる子も出てきます。

※ 二人組→四人の小グループ→学級全体と話し合いの形態を変えていくこともできます。

Q：国語の授業では、どのようにノートを作ればよいのでしょうか。

A：ノートには次のような役割があると考えられます。

I：練習としての役割…漢字の練習などをする。

II：記録としての役割…学習した事（板書）や自分の考えなどを書き留めておく。

III：整理する役割…調べたり学習したりしたこと，自分や友だちの考えを分類整理する。

IV：思考を促す役割…自分の考えの筋道や過程を書き留めたり，新たな気付きや自分の考えを表現する。

質問のとおり，ノートは「とる」ものではなく「作る」ものです。そう考えるとⅢやⅣが大切だと言えますが，まずは「ノート作り」ができるための基本的なものをしっかりと身に付けさせていきましょう。

## アドバイス：

### ①まず，ノート作りの基本を教えましょう

- ・適切なノートを選ぶ…発達段階とねらいに合わせて選ぶことが基本です。一般的に中学年以上の授業用は「行のノート」を使用することが多いようですが，国語では学年を問わずマス目のノートを使うことがお勧めです。マスを使うことで整った文字を書くことができます。また，原稿用紙の使い方，段落意識，文字数など，表記のきまりを常に意識させることができます。
- ・書き方を教える…日付を書くこと，題名やタイトルの書き方，簡条書きや表の書き方，板書の書き写し方（学級内でのチョークの色の約束），色（鉛筆色，赤，青）の使い分け，プリントの貼り方など，学級内で共通にしたいことは一つ一つ指導します。

### ②整理したり思考を促したりするノート作りをさせましょう

ア 整理やまとめの仕方を示し，使える表現方法として定着させる

表にする，絵や図で表す，矢印を使う，色分けする，といった表現の方法とその特徴を示して使えるものにさせていきましょう。例えば，表は比較する際に便利であり，図や表は視覚的に構成や全体像をとらえやすい，矢印は変容を表す時に便利であるという特徴を持ちます。また，学習問題や学習課題（ねらい）は青線で，まとめや自分の考えは赤線で囲む，重要な語句は赤字で書くなど，学級内で約束を決めておくといよいでしょう。

イ ワークシートをノートに書かせ，ノート作りのイメージを持たせる

授業の中でワークシートを活用することがよくあります。これは，教師が枠や表を作り，子ども達はその表の中を埋めていくことが活動の中心となります。そこで，自分で思考した内容を書いたノート作りにつなげる手立ての一つとして，教師が作った枠や表をノートに書かせる所から始めるといった具体的な活動を組んでみましょう。枠や表の項目の意味を考えたり，項目どうしの関係を考えたりするなどの思考を伴った活動になります。

- ※ 良いノートは教室に掲示しましょう。教師はすべての子のノートを見ることができませんが，子どもたちが友だちのノートを見る機会はなかなかありません。そこで，良いノートを教室にどんどん掲示すれば，良さをまねたり取り入れたりしながら，自分のノート作りの参考とするはずです。そして，次は自分も掲示してもらおうとノート作りの意欲が高まることも大きな効果です。

**Q：鉛筆の持ち方がなかなか定着しません。どうしたら、上手に持って書けるようになるのでしょうか。**

**A：鉛筆を正しく持つことは、美しい文字を書くことばかりでなく、速く書くこと、そして疲れずにたくさん書き続けられることにもつながります。学習指導要領解説国語編では、第1学年及び第2学年の「書写に関する事項」に**

「持ち方を正しく」するためには、人差し指と親指と中指の位置、手首の状態や鉛筆の軸の角度などを適切にすることが必要である。

**と示されています。習慣が定着しやすい低学年（1・2年生）の段階で特に徹底的に指導し、確実に身に付けさせることが効果的です。**

## **アドバイス：**

### **①正しい持ち方を体得させましょう**

見本を見せたり、写真や絵を使ったりして正しい持ち方を会得させます。同時に机や椅子への正しい座り方、書くときの姿勢も教えるとよいでしょう。少し時間がかかりますが、初めは教師が一人一人を確認し、持ち方や持つ位置などを正しく修正してあげましょう。

### **②特別な鉛筆や器具なども使ってみましょう**

断面が三角形の鉛筆は持ちやすいという利点があります。

また、正しい位置や場所に指を置くための器具の使用も効果的です。鉛筆に差し込んで使うことができるので、便利です。（右利き用、左利き用両方あります）

### **③やわらかい芯の鉛筆を使うように指導しましょう**

芯のかたい鉛筆を使うと、指に余計な負担がかかり、小さな手で力の弱い低学年の児童には向きません。芯のやわらかい鉛筆を使いましょう。また、普通のサイズより太い鉛筆や、消しゴムのついた鉛筆、デザイン性を追求した形状が一般的でない鉛筆もこの時期には避ける方がよいでしょう。シャープペンの使用は止めさせます。

### **④どの場面でも正しく持つ意識を持たせましょう**

国語の授業以外にも鉛筆を持つ機会は非常に多くあります。授業内容を問わず、常に学級全体に声かけをしたり、正しく持っている子を称賛して意識を高めたりするなど、鉛筆を正しく持とうとする意欲を喚起していきましょう。正しい持ち方の絵や写真を、教室の前面に掲示しておくことも効果的です。

また、せっかく学校で正しく持っていて、家庭で徹底されていなければ効果は半減してしまいます。家庭に協力を依頼し、常に正しく持たせることで確実な定着を図っていきましょう。

※ 低学年で体得させてしまうことが何と言っても一番です。しかし、長時間書き続けたり長文を書く機会が増える高学年では、間違った持ち方による指の疲労感を感じたり鉛筆だこができたりすると、自覚的に正しく持とうとしたり、直そうとしたりする子が出てきます。一度ついてしまった癖を直すのには時間がかかりますが、学級全体に正しく持とうとする雰囲気が醸成されるとより効果的ですから、粘り強く指導していきましょう。